

「融合」という概念についての一考察 On the Idea "Yu-gou"

岩淵 恵

IWABUCHI Megumi

In this school I have learnt the word "Yu-gou" for the first time, and then I began to think about the meaning of this new word consulting a dictionary and searching for this word in my texts. Through those tasks, I have concluded that it is a word of a rather Japanese mind and cannot be translated into any other language easily. We may be able to translate this thought not by a word but by an act. There are some cultural examples such as Shakespeare and Noh plays. I suppose another method of "Yu-gou", that is the combination of Noh and medical or physical methods, rehabilitation through my experience.

1. 「融合」という言葉

このような聞きなれない言葉にあったときはまず、辞書を引く。とりあえずそれしか言葉の意味を知る方法はない。これまで、たとえば「モータリゼーション」や「オンブズマン」という言葉をはじめて聞いたときにとった反応がそうだった。手元にある英、仏語の辞書をひき、辞書に出ている意味を製図の様にくみあわせてみると、その言葉の意味がだいたいあきらかになってくる。時間的、精神的に余裕がない時には、辞書に載っている第一の意味しか目にはいらない。たとえば、essay という言葉に「試みる」という第二の意味があったことはつい最近になって気がついたことである。

ところで「融合」である。日本語である。外来語だとすれば「デモクラシー」のようにカタカナになるだろうし、適当な外国語訳(英語訳)は思いつかない。そこで和英辞典¹を引いてみる。それによると融合に当たるのは fuse という動詞だという。電気系統の接続が切れることをヒューズがとぶというが、その fuse と同じつづりである。さて fuse を動詞として使った場合、melt とか、make into one という意味になる。Melt = 融ける という意味での融合は、核融合とか、実生活とはかけ離れた化学の分野の言葉となる。もっとわ

かりやすい例をあげよう。絵の具をパレットの上で混ぜ合わせると全く別の新しい色になる。小学生でも経験することである。融合と言うより混合だが、それを融合というのなら、融合することによって、元の色にあたる個性を否定することにつながりはしないかという危惧も生まれる。ところで融合に当たる英語には他に combine (結び合わせる) という意味に近い merge という動詞や、make harmony (調和させる) という言葉がみいだせる。

今度は融合という言葉、日本語辞典、すなわち国語辞典² で引いてみる。すると融合とは「融けてひとつになること」「合併」「統一」などとなる。外来語と言うよりも、多分に日本的なところのある概念らしい。聖徳太子の十五条憲法に「和を持って尊しとなす」という言葉がある。ハーモニーという意味をとると、それとほぼ同様の言葉となるだろう。また「混ぜ合わせてあたらしいものをつくる」という意味合いなら、鴨長明『方丈記』の「行く川の流れはたえずして、しかも元の水にはあらず」を連想する。そうなるとインド思想、仏教の思想にも通じるものになるだろう。

次は課題で読んだ本の中からとにかく「融合」という言葉を含む文章を拾ってみることだった。参考図書インモース『変わらざる民族』の中の一章「消えた泉」では、フェロノサ訳の日本の能『井筒』の影響を受け、イギリスの詩人イエーツは 1919 年詩劇『鷹の井戸』を創作した。それを 1975 年日本に戻し『鷹姫』という新作能がつくられた。この約半世紀にもわたるプロセスを、「東西の伝統の大胆な結合」³ と表現している。この段階では「結合」である。ちなみに上田邦義 *Noh Adaptation of Shakespeare* では union という言葉が使われている⁴。種としての人間の進化の過程を形而上学的にとらえたル・コント・デュ・ヌイの『人間の運命』では、「人間の進化の哲学的な結果として、理性の努力と直感の努力の融合が不可欠」⁵ だと指摘されている。

「融合」はまず個人の思考内でおきる。たとえばファンタジーのクラスで読んだ C.S. ルイスの作品『ナルニア国物語』が、比較文化のクラスで読んだ『能がわかる 100 のキーワード』と「融合」した結果、イギリスファンタジーのあるものは能に似ている、などという結論に到達してしまう。とんでもない思い違いかもしれないが、『ナルニア国物語』の現実世界とファンタジーの空想世界の二重構造、しかもそれが時間的に等差数列表的でなく、過去と現在をいきつもどりつしているのは、世阿弥の能の「複式夢幻能」⁶ に似ているのではないか、と思うのである。もともと「複式」というその言葉自体も、『能がわかる 100 のキーワード』の著者津村氏の思考中でおきた融合の結果ではないだろうか。津村氏は一ツ橋大学で経済を学ばれておられるようだから、イタリア起源の「複式簿記」という経済学という言葉から発想なさっているのかもしれない。

この院に来てから知った、フランス人能楽研究家ノエル・ペリーの「融合」の例をあげ

たい。明治後半カトリック司教として来日したペリーは、ふとしたきっかけで能を知り、以来司教を辞めてまで研究に没頭するようになった。ペリーは日本を離れるまでの二年間『Melange, (メランジェ)』という日本文化研究の雑誌を発行していたという。その誌名「メランジェ」という語がはからずも「融合」という意味に一番近い外国語訳になるのではなだろうか。

2. 私的融合案

大学の頃、友人の帰国子女たちは、それぞれ独特の悩みを抱えていた。幼少の頃から二つの文化の中で生活し、言葉も無意識のうちに使い分ける生活に慣れきっている。しかし、それではいったい、自分のアイデンティティーはどちらの文化にあるのだろうかというものだった。それぞれ深刻に悩んで、やがて自分の中でそれを「融合」させていった。「融合」は個人の課題でもある。

私は現在身体障害者である。しかし学齢期の殆どは健常者だったので、その記憶から抜けられない。これを現実の自分とどう「融合」させていくかが、しばらくの間私の課題であった。この大学院で能とシェークスピアの文化的な融合を学んで、私は、能と、障害者として経験したりハビリテーション医療を融合させてはどうかと思った。融合というより応用といったほうがいいかもしれない。

元々病気の後遺症で身体障害はあったのだが、廃用症候群というもので最近とみに身体能力が衰え、屋内でも転倒したり支えなしで立っているのが難しいほどになっていた。医師と相談の結果、リハビリセンターに通って指導を受けることになった。いわばリハビリ教室を卒業してから、この大学院に来たのである。スクーリングで仕舞いの実技(『羽衣』キリの舞)があったが、実技はできないので見学だけさせてもらっていた。見ているうちあることに気づいた。このゆっくりしたすりあし歩行と、リハビリセンターで見た患者さんたち(脳卒中・脳梗塞の高齢者が多かった)のすり足歩行、緩慢な動きが似ているように思い、能の動きをリハビリに應用できないか、と思ったのである。能の所作の型は「立つ、座る、前に出る、後ろに退く、右に行く、左に行く」「両足は床にぴったりつけて進む」⁷などの基本動作の組み合わせだというのが、「立つ、座る、歩く」はADL(ability of daily life, 日常生活動作)の指標にもなっている。それに、ゆっくりと足裏全体で歩くのは転倒を防ぐ意味でも大事なことである。能の所作は中国の太極拳にも似ている。能の基本動作では歩をすすめるとき両足を平行に運ぶというが、太極拳でも「重心の移動を線の上でなく、面の上で行いたいため、長方形の歩行を使う」⁸。また、できるだけゆっくりとした動作を

推奨するところは、「早い動きは能の格が落ちる」という能の所作と同じである。太極拳の成立は後漢時代とされているから歴史的には能の伝来とだいたい期を同じくする。何か同様のルーツがあるのかもしれない。太極拳は本来武道だが現在は「気」という不可視の体内の生命エネルギーを自分でコントロールする、高齢者にもできる健康体操にもなっている。中国の公園などで市民が並んで太極拳を行っている光景はよくみられるものである。

さて『羽衣』キリの舞の実技では、「東遊びの数々に」と腰を落とした姿勢から立ち上がるときに、高齢の受講生はふらついていて、何回も繰り返すうち疲労もかなりたまるようだった。仕舞いは、筋力、体力がないとできない一種のスポーツなのである。米沢出身で本間久雄という英文学者がいた。本間の弟子の一人である国文学者の岡保生氏はこう回想する。

「本間先生は、米沢の上杉公、上杉家のお抱え能役者の家に生まれました。そして子供の頃から能舞台に立っていたといわれている通りでありまして、ですから先生は晩年まで姿勢が良くて、非常に足腰がしっかりしていらっしやいました。」⁹

PT(Physical Therapy, 理学療法)の目的には筋力を回復、維持させることも含まれる。そのPTに足腰をしっかりさせる仕舞いはどうなのだろうか。もちろん半身麻痺など障害がある人には自力では無理な運動である。その場合はセラピストの介助で行ってはどうか。曲によっては可能だと思う。

謡はST(Speech Therapy, 言語療法)にどうだろうか。息を大きく吸い腹から発声することは健康のためにもストレス解消にもなる。とかく闘病生活はストレスがたまるものである。私は言語にはあまり障害が残らず特別なリハビリは必要なかったが、一語一語区切って抑揚を付けながら話す第二外国語としての中国語学習は、思いがけず言葉のリハビリになった。謡にも節があり、音域もせまいので発声しやすい。やはりスクーリング時に『高砂』の謡の実技があり、私もそれだけは参加できた。「はや住之江に着きにけり はや住江に着きにけり」と、思うように上げ下げのコントロールができなかったが、リハビリもやりにくいことの反復練習なのである。

手を使う囃子や扇の扱いはOT(Object Therapy, 作業療法)にもなりそうだ。実際タンバリンをリズムをとってたたく療法もある。扇を扱う所作はかなり高度なものだが、いすに座って動くほうの片手で扇を扱うことは、箱の中から箸で豆を一つ一つ取り出した返すような、忍耐だけ要する無味乾燥な行為よりずっと美しく楽しいことではないかと思う。

リハビリテーションの目的はADL、QOL(Quality of Daily Life)を向上させることで

ある。生活の一部となった文化は訳せば QOL (生活の質) に近い概念である。そう考えていくと、能が総合舞台芸術であるように、能を「総合リハビリ」にできるのではないかと思う。リハビリテーションは医師の指示のもとで行われるので、最近の医学の動向のように、部分的に手だけ足だけになりがちである。しかし一部分だけ動かしてもそれほど効果的ではない。リハビリテーション医療面で応用できないか、本学の医学部などで検討なさってはどうか。治療だけでなく患者の適度な運動、ストレス解消にもなる。

数年前、作家の大江健三郎氏のノベル文学賞受賞の少し前、米沢の隣町で氏の「人を癒す文化」という講演を聞いたことがある。確かに文化はストレスを吸収する。最近福祉施設や医療機関でも音楽療法などが行われるようになったが、能も文化的な運動療法として行われたいだろうか。仕舞いや謡は中国の公園での太極拳のように市民の健康体操にもいいかもしれない。現在高齢者は「健康を保つためには一日一万歩」といわれ、やや脅迫観念を持つ人もいるが、現在のような車社会では危険なことでもある。能ならば場所をとらず、公民館や体育館でもできるだろう。老人クラブなどで行われてもよい。芸術文化の安売りと批判されるかもしれないが、工芸作品にみられるように芸術は本来実用的なものである。それに愛好者のすそ野が広がれば、おのずと能も活発になっていくだろう。

3. 「融合」という概念

学問上の融合は、一般に「学際」というが、違った視点を持つことによって新しい発見を得ることができる。たとえば経済学と歴史学の融合をはかった大塚久雄の学問は「大塚史学」として戦後の思想界をリードした。文化上の融合にも新しいものを生むという利点があるが、それを強制的にすべての分野に広げることにはある種の危惧を感じる。政治、経済、思想上でも強制的な合併融合により混乱がおきているのが現状だ。たとえばヨーロッパ統合という半ば強制的な政治上の融合は、一時経済や文化の混乱を各国にまねいたというし、「エキュメニカル運動」という1960年代からの宗教上の融合も、カトリックとプロテスタントの混同がおきている。先述のペリーは典礼を重んずるカトリック司祭だったためか、能であっても伝統的な形式を崩した融合パフォーマンスを「一つの会で同一の人物に関する曲をつづけて番組の統一を図るというような試み」¹⁰は失敗して当然、と批判的に見ている。

2 で示した能・リハビリテーション融合案は、能が生活に身近なものとなり、実際に謡や仕舞いをする人が本物の舞台を見たいと思うようになれば、能が演じられる機会も増えるだろうし、ますます多くの人々が能に触れることができるという考えかたである。しかし

人には文化を選ぶ権利がある。強制的に書道や文芸、音楽をやらされても楽しくはない。プロは別だろうが、大多数の文化愛好者にとってはまず文化を通して生活を楽しむことが、すなわちまた文化となるのである。

私の住む町米沢は「文化の町」というキャッチフレーズがある。ここでの市民のごく普通の文化とのかかわりかたを紹介したい。たとえばある女性は家庭を持ちつとめをもちながら書道を習い年数回コンクールに出品する。その一方米沢の方言で川柳をつくる会にもはいつている。自作の川柳を書道で書く。賞をもらうためとか教養を高めるとか明確な目的があるわけではない。ただそれが楽しいし、かつ日常生活のストレス解消になるからである。私は、こういう人を「草の根の文化人」と呼びたい。

中国の小説家魯迅の『故郷』に「歩く人が多くなれば、そこが道となるのだ」という一節がある。そのように、愛好者が増えればそれが文化となるのではないか。文化は人がつくり人が運ぶものである。人の交流が盛んになれば、文化上の融合は自然に起きるだろう。それも最も無理のない形で。

【参考文献】

- 増補、改訂『C.S.ルイス ナルニア国年代記 読本』山形和美、竹野一雄編著・国研出版・1995
 「世界大百科事典」第二版・日立デジタル平凡社・1998

-
- 1 新和英中辞典・研究社
 2 新明解国語辞典・三省堂
 3 T.インモース著、尾崎賢治訳『変わらざる民族 - 演劇東と西』南窓社、1972年2月、121ページ
 4 Kuniyoshi Ueda, *Noh Adaptation of Shakespeare—Encounter and Union* 北星堂書店、2001年12月
 5 ル・コント・デュ・ニューイ著、渡部昇一訳『人間の運命』三笠書房、1999年11月、302ページ
 6 津村禮次郎『能がわかる100のキーワード』小学館、2001年3月、12および37ページ
 7 前掲書『能がわかる100のキーワード』172-173ページ
 8 汪調源『太極拳』日本文芸社、1987年6月、31ページ
 9 「本間久雄」『山形の先達者』山形県生涯学習人材養成機構、1998年、114ページ
 10 ノエル・ペリー著・井畔武明訳『能』桜楓社、1975年、(『能の研究』日仏会館、1944年3月刊、を復刊したもの) 93ページ